

令和 3 年 6 月 21 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00740

研究課題名(和文) 大学生英語学習者のつまずきの要因と適切な支援

研究課題名(英文) Accommodating Japanese College EFL Learners with their Troubles in Studying English

研究代表者

築道 和明(Tsuido, Kazuaki)

広島大学・人間社会科学研究所(教)・名誉教授

研究者番号：30188510

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、英語学習に困難を抱える日本人大学生に、英語学習のつまずきの実態や要因を考慮し、一定期間指導を行い、英語学習に対する意識の変容を探り、教室実践へのヒントを探ることである。その結果、語彙レベルで不十分なローマ字知識の適応があること、英文法では基本的な語順、中でも名詞句の修飾構造につまずく傾向にあること等が確認された。そこで、学習者のニーズを踏まえ、達成可能な課題をスモールステップで経験させ、毎時間の振り返りを記述させ、振り返りシートを媒介とした教員のフィードバックを継続して与えた。結果として、学習開始当初の英語や英語学習への嫌悪感は徐々になくなり、意欲面での向上がみられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、初等・中等教育段階で求められている多様な認知特性を有する学習者に対する指導や支援という観点から、改めて大学レベルの英語学習者を対象に、学習者のニーズや実態を踏まえて、どのような課題や支援が可能であるかを明らかにした点において、英語教育学研究の新たな研究領域を開拓したと考える。本研究で明らかにされた内容は、今後高等教育段階での英語教育カリキュラムの在り方や授業を担当する英語教員にどのような資質・能力が求められるかといった教員養成カリキュラムの開発に対して、重要な示唆を提供するものであり、この点に本研究の社会的意義があると言える。

研究成果の概要(英文)： The aim of this research project is to pursue better classroom guidance and accommodations for Japanese college learners of English who are regarded as unsuccessful language learners. The study also aims to examine what effects such classroom practice may have on the learners' attitude towards English and English learning. The main results of this study are: It confirms the learners attempt to apply their insufficient knowledge of romanized Japanese to studying English vocabulary, and they also lack in their knowledge of the basic English word order; especially they have difficulties in mastering appropriate modification of noun phrases in longer sentences. Keeping these aspects in mind, our classroom practice provides the learners with achievable small tasks so that they can feel a sense of achievement one at a time in each lesson, and ask them to reflect on each class in order for them to develop themselves as autonomous language learners.

研究分野：英語教育学

キーワード：大学生英語学習者 英語学習のつまずき 多感覚構造化学習 動機づけプロセスモデル リメディアル教育 英文法学習 英単語学習

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景を(1)大学レベルの英語教育における課題と(2)特別支援教育と英語教育との関係、といった二つの視点から述べる。

(1) 大学英語教育における課題

まず、大学レベルの英語教育における課題である。我が国の多くの大学では、外国語(英語)を必修科目としてカリキュラムに位置づけている。その際、大学入学時までの英語力によって習熟度別のクラス編成を行っている大学も多い。また、近年の社会のグローバル化の流れや少子化に伴う大学間の競争等が相まって、英語の母語話者を積極的に雇用したり、専門分野においても英語による授業を提供する等、英語教育の改革をコアにした大学改革を進め、英語教育を重要な側面としてカリキュラムに位置づけている大学も多くみられる。実際研究代表者が勤務していた大学においても教員の応募に関しては、その専門領域を問わず英語による模擬授業を行うといった状況も存在した。この例からも明らかなように「英語」が大学の教育・研究カリキュラムの中で大きな位置を占めつつあると言える。

一方、2017年3月に告示された小学校・中学校学習指導要領の改訂に伴って、初等・中等教育段階では、英語教育の「低年齢化」、その結果としての「長期化」、到達目標や学習内容の「高度化」等が英語教育改革の流れの中で実施され始めた。このような外国語教育政策の変化の流れにあって、英語運用能力に秀でた優秀なグローバル人材を一定程度創出しようといったプラスの側面は当然考えられるが、一方で、これまで以上に多くの英語学習につまずく学習者の更なる出現の可能性も否定できない。とりわけ、大学レベルの英語学習では、初等・中等教育段階での語彙量の増加や学習内容の高度化・複雑化が予想される文法学習等、言語材料が難しくなることから、今後、初等・中等教育段階で英語学習につまずいたままの状態、英語をさらに学ばざるを得ない大学生の存在が増えると予想される。今後も大学のカリキュラムに英語教育を必修科目として位置づける教育課程を維持する限り、大学教育において、英語学習に困難を抱える学習者への支援をどうとらえ、進めるかは、多くの大学に共通する解決すべき重要な課題の一つである。

(2) 特別支援教育と英語教育との関係

次に特別支援教育と英語教育からの課題について述べる。2012年に文部科学省は、公立の小・中学校の通常学級において、特別な支援を必要とする児童・生徒が約6.5%在籍しているとする報告を出した。これは、教員の見立てによる割合であるが、実際に学習に困難を感じている児童・生徒の数はさらに多いと推測される。また、前述した2017年3月に示された学習指導要領においても、各教科の指導において、「障がいのある児童・生徒などについては、学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導法の工夫を計画的、組織的に行うこと」を求める記述が新たに加わった。つまり、各教科指導に特別支援教育の観点を取り入れた指導が今後は初等・中等教員には求められることになったのである。しかしながら、現状の英語科教員養成カリキュラムには特別支援教育の視点から学生が学びを深める授業は提供されていない。その理由としては授業時間数の増加がカリキュラム編成上困難であるといった物理的な理由もあるが、そもそも英語科教員養成を担当する大学教員側に特別な支援の必要な学習者の存在という問題そのものが認識されていないということが考えられる。

また、英語科教員自身が英語学習のプロセスにおいて特に大きな困難に直面した経験を有しておらず、英語学習そのものの困難さを具体的にイメージできないといったことも考えられる。

言い換えるならば、多くの英語科担当教員は、英語学習に成功した数少ない少数派であり、それは大学での英語教育担当教員についても言えることである。自らが失敗したり、苦労したりした経験がない学習対象に対して、学習のプロセスのどこで、どのようなつまずきが生じるかを適切に把握するためには、教員自身の意識的な努力が必要であり、そうした努力が欠如している場合は、英語学習者のつまずきの要因を学習者自身の怠学に短絡的に結びつけてしまう可能性も否定できない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、英語学習に何らかの困難を抱える日本人大学生を対象に、まず英語学習のつまずきの要因を把握した上で、次に適切な支援や配慮に基づく指導を実践し、学習者の英語・英語学習に対する意識等の変容を探り、最終的には英語学習につまずく学習者に対する支援や配慮の在り方について提言することである。本研究では、英語学習につまずく大学生英語学習者への指導の方策として、英語圏で研究・実践の長い歴史があるデイスレクシアに対する支援、とりわけ多感覚構造化アプローチ (multisensory structured learning approach, 以下 MSL) にヒントを求める。また、大学レベルの英語学習者においても、そのつまずきの主要因として、英語学習入門期における英単語の読み(音声)・書き(綴り)学習や基本的な英文構造(語順)の理解における困難さが想定されるのではないかという前提の基に、授業内でクラス全体や個々の学習者に対して、学習者の学習状況を適切にモニタリングしながら、対象クラスや個々の学習者にとって有益と考えられる教材や指導を一定期間試み、指導の成果と課題を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、まず、特定の大学生英語学習者を対象に、過去の英語学習経験についての彼らの声を集団、個人の両側面から丹念に拾うこととした。また、基礎的な英語力調査を実施した上で、英語の基本構造面での英語学習上のつまずきを把握した。また、こうした大学生英語学習者に対する指導については、「教室内での授業実践の方向性を決め、実践を行う」→「授業の中でもさらに学習者の声を拾う」→「授業中の行動観察を行いながら、授業内でのアセスメントを通じてさらに実践を改善する」といったように、いわゆる「アクション・リサーチ」的な手法を用いることを原則とした。

また、4名の研究者は、それぞれに固有の研究テーマを有しているので、研究代表者が一定の原理・原則で授業実践をしたり、共通の調査内容で一斉に学習者の実態を把握するといったような研究アプローチは採用せず、各自の興味・関心をコアにして、その中に英語学習につまずく大学生英語学習者の声を丹念に拾い、指導に活かすという原点は失わずに、研究を遂行することとした。

4. 研究成果

(1) 英語学習につまずく大学生英語学習者の実態の一側面

英単語学習上の誤りの傾向

英語が苦手な大学生英語学習者 17 名を対象に、未習語と判断される難易度の高い 15 の英単語を提示して、それらをどのように音声化するかを探り、decoding 方略を分析した。その結果、

ローマ字読み、既知語活用読み、③類似語活用読み、といった3つの類型が見られた。「既知単語活用読み」とは学習者自身が既に学んできた英単語の一部を未知語の decoding の際に応用する方略である。例えば、'theory' を音声化する際に、'the' にヒントを求めるといった方略を意味する。一方の「類似語活用読み」とは、既習語の単語そのものを未知語の発音に応用するものであり、'sphere' を 'space' と音声化するというものである。こうした3つの decoding 方略の中でも、ローマ字の規則に従って音声化する傾向が多くの学習者に見られた。

ローマ字の英単語学習への影響については、学習者自身の声からも確認された。8名の大学生

を対象にしたグループインタビューでも、英語学習、とりわけ英単語学習上のつまずきとしてローマ字と英単語の相違について理解できなかったとする声が多く聞かれた（「ローマ字と英語の違いがわからなかった」「単語の読み方がわからなかった。ローマ字と違うので」等）。英語学習入門期において、ローマ字は日本語をアルファベット文字を用いて表記した文字体系であり、英語ではなく、日本語であるといった基本的な理解が促されれば、こうした英単語とローマ字との混乱は一定程度回避できると期待される。

英語の基本構造学習上の誤りの傾向

次に、英語の基礎的な文法についての定着度を中学校段階で学習する基本本文の語順整序問題を通して把握した。習熟度レベルでは中位から下位に該当する 80 名の大学 1 年生を対象に調査を実施したが、基本本文の定着ができていない学習者層が一定数存在することが確認された。

こうした基本本文の理解の実態をさらに詳しく分析するために、別の学習者グループ（22 名）を対象に誤答率や誤答の傾向などを分析した。その結果、基本本文のうち、疑問詞で始まる疑問文（How many...? Whose...?）の正答率は 30%に満たず、中学校 1 年段階での学習内容が未定着のまま、大学に入学している学習者の存在が確認された。その他、分詞の後置修飾についても正解率は 30%に満たない状態であった。これらの調査結果から、英語学習に困難を抱える大学生学習者の一つのトラブルスポットとして、以下の点が示唆された。

< 基本的な語順→名詞句の英文内の位置理解→名詞句自体の理解 >

つまり、英語の基本的な語順について、平叙文や単純な構造は、一定程度定着しているが、英文構造そのものに複雑な要素が入ると困難になるということである。例えば、疑問詞で始まる疑問文の中でも Where であったり、When 等のように平叙文から、いくつかの変形操作を加えれば正しい英文にたどり着く場合と比較して、Whose, How many 等で始まる疑問文では疑問詞部分での操作が加わり、理解・定着を困難にしていると考えられる。

この点は、分詞の修飾構造にも言える。SVO の全体的な構造は理解していたとしても名詞句がどの部分に該当し、また、その名詞句内の語順についても理解しなくてはならず、定着を困難にしていると思われる。

（2）MSL と動機づけモデルによる授業実践による学習者の意識の変容

実践の概要

教室実践においては、MSL の原則を極力取り入れること（多感覚に訴える指導、母語である日本語との対比、発見的な手法による英文法の理解等）と Dörnyei（2001）の動機づけプロセスモデルに準拠した。具体的な教室実践については、上述の MSL を取り入れながら、「学習者のニーズ分析」→「ニーズ分析に基づく適切なゴールの設定」→「達成感を味わえる授業内活動の構成」→「協同的で支持的な学習環境の構築」→「授業の振り返り」→「振り返りに対するフィードバック」といった流れで授業実践を行った。

学習者の英語や英語学習に対する意識の変容

毎授業の終わりに授業の振り返りを記入させたが、1 枚の用紙に 15 回分の全授業の振り返りと単語テストの得点を記入できるようにした。その意図としては、毎回の授業及び授業回数に応じて自身の授業への取り組みを学習者自身が自己認識できること、教員にとっては、学習者からの質問等に回答を提供したり、学習への取り組みへのコメントを入れる等、学生とのコミュニケーションの一手段としても活用することにあつた。

こうした授業実践が学習者の英語や英語学習に対する意識にどのような影響を及ぼしたかを全 15 回授業の振り返り記述を個人、クラス全体で分析した。以下、振り返りのコメント分析から明らかになった主な点をまとめる。

まず、ネガティブなコメントが授業の回数を重ねるたび少なくなっている傾向がみられた(表1参照:出現数が多くなる場合は赤,少ない場合は青として提示。さらにそれぞれの色の濃さに比例して出現数を示している)。この結果から,参加者は当初,これまでの経験から自身の英語学習に対しネガティブな評価を行う傾向にあったことがわかる。しかしながら,動機づけプロセスモデルを実践した授業を受けていくにしたがって,自身の英語学習にネガティブな評価を行わなくなっていることが伺える。自身に対しネガティブな評価を行わなくなったことは,動機づけプロセスモデルプロセスに含まれる「参加者の自己肯定感を配慮し,自信の向上を目指す」という点において,一定程度成功したと考えられる。

また,ポジティブなコメントについて,ほとんどのカテゴリーの出現数が第2週から第15週にかけて一定数を保たれ,「できた」は授業の回数を重ねる度増えていく傾向が見られた。このように「できた」のカテゴリー出現数が増えたということは,参加者が自身の英語学習に対してポジティブな評価をするようになったと言える。したがって,動機づけプロセスモデルの最後の段階である「肯定的な自己内省を促す取り組み」が上手く機能し,参加者が肯定的な自己評価を行っていたことが伺える。

次に,抱負に関するコメントについて,「頑張る」というコメントは第2週から第15週まで一貫して出現数が上位のカテゴリーであった。最初から最後まで参加者が「英語学習に対し「頑張る」という姿勢をとっていたということから,第2週から,動機づけプロセスモデルの最初の方の段階である,「動機づけの基礎となる環境作り」と「最初のきっかけとなる動機づけを促すこと」に成功していたと考えられる。

表1 週毎のカテゴリー使用のクロス集計とヒートマップ

	難しい	残念だった	できなかった	わからなかった	嬉しい	分かった	頑張った	できた	頑張る	したい
第2週	9	3	7	5	3	5	10	13	25	9
第3週	14	3	5	5	0	9	6	10	13	13
第4週	11	4	6	5	6	12	7	6	17	6
第5週	14	2	1	3	3	12	6	12	13	3
第6週	9	2	3	7	2	10	4	11	11	8
第7週	11	2	2	7	3	11	5	7	22	8
第8週	13	1	7	8	1	7	4	19	19	7
第9週	9	0	5	3	0	3	5	17	12	8
第10週	10	1	3	4	1	14	6	19	23	2
第11週	8	1	3	2	2	8	6	15	14	4
第12週	3	1	2	1	1	4	4	15	15	3
第13週	3	1	4	2	2	7	6	23	15	3
第14週	4	2	2	2	0	3	4	19	24	2
第15週	1	3	0	0	1	3	7	11	26	3

< 引用文献 >

Dörnyei,Z (2001). *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Umeki Riko, Tsuido Kazuaki
2. 発表標題 Analysis of Attitude Change in Japanese University EFL Learners through Reflection
3. 学会等名 The 17th Asia TEFL (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 辰巳明子, 築道 和明
2. 発表標題 フォーカス・グループインタビュー調査による英語を苦手とする大学英語学習者の実態把握
3. 学会等名 日本リメディアル教育学会 第15回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 築道 和明, 兼重昇, 辰巳明子, 梅木璃子
2. 発表標題 語順整序問題での誤りの傾向と分析 英語が苦手な大学生英語学習者の事例を基に
3. 学会等名 日本教科教育学会 第45回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 兼重昇, 築道和明, 辰己明子, 濱崎太賀
2. 発表標題 英語の不得意な大学生のDecodingの傾向とその指導への一考察
3. 学会等名 日本教科教育学会 第44回全国大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 大谷みどり, 築道和明, 飯島睦美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 152
3. 書名 特別支援教育の視点でどの子どもも学びやすい小学校英語の授業づくり	

1. 著者名 築道和明, 兼重昇, 辰己明子, 梅木璃子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ニシキプリント	5. 総ページ数 100
3. 書名 大学生英語学習者のつまずきの要因と適切な支援	

1. 著者名 卯城祐司, 櫻葉みつ子, 築道和明, 兼重昇, 辰己明子, 他26名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 215
3. 書名 中等英語科教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	兼重 昇 (Kaneshige Noboru) (10304148)	大阪樟蔭女子大学・児童教育学部・教授 (34409)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	辰己 明子 (Tatsumi Akiko) (90781211)	広島修道大学・経済科学部・講師 (35404)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	梅木 璃子 (Umeki Riko)	広島大学・大学院教育学研究科・博士課程後期学生 (15401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関